

〔講演要旨〕 富士川西岸における安政東海地震以前の洪水被害

行谷佑一*(産総研)・宋倉正展(産総研)

§1. はじめに

1854 年安政東海地震により駿河湾西岸部が広域に隆起したことが知られている[例えば, 石橋(1984)]. これは南海トラフ沿いで発生した同地震の震源域が駿河トラフにまで及んだ可能性があることを意味するが, 駿河湾奥の富士川河口よりも北側まで破壊が及んだかについては統一見解が得られていないのが現状である.

本研究では, 現地に残された史料を基に富士川の洪水被害を整理し, 現在の地形を見ることで, 同地震により富士川河口西岸域が隆起した可能性について検討を行う.

§2. 安政地震よりも前の富士川の流路

富士川河口から 4.5 km 程度上流の東岸部には雁堤(かりがねつつみ)と呼ばれる堤防が存在し, 1621 年~1674 年に造られた[例えば, 甲府河川国道事務所(2004)]. 雁堤建造以後, 河口部における富士川流路は現在の流路よりも西側に位置していたと推定される.

その根拠の一つとして, 木屋江戸資料館所蔵の天保年間作成の絵図などには, 大升形堤や長堤, 外堤といった堤防が記されている. この大升形堤のすぐ近くを富士川が流れている様子が記録されている.

大升形堤とは蒲原中学校よりも北に位置した堤防のことであり, 現在の富士川右岸堤防から西へ 0.6 km 程度離れたところに位置している. このように, 富士川が現在の流路よりも西側を流れていた可能性は高い.

§3. 河口域における富士川の洪水記録

さらに富士川が現在よりも西側を流れていたことを示す根拠として洪水被害記録が挙げられる. すなわち, 富士川西岸部である蒲原地域はたびたび洪水被害に見舞われた.

木屋江戸資料館に所蔵されている『渡邊金璋生涯略記』には, 例えば寛政四年七月十三日(1792 年 8 月 30 日)の項に「富士川大洪水本瀬中之郷下ヨリ真直二大升形堤ノ洞中エ突當(中略)本堤字二番ヨリ切込堤流失天神下地蔵前中河原下河原外堤長堰馬渚洲迄皆亡所ニナル」と記されている. 先に述べた大升形堤が洪水により切れ込み, 天神下や地蔵前といった集落が亡所になったことが記されている. これらの集落は蒲原中学校の西側の集落である. また, 長堤が現在の日本軽金属工場の南側にあたる馬渚州まで亡所になったことが記録されている.

このほか, 文化十三年閏八月四日(1816 年 9 月 25 日)の項には「大雨大風大波立富士川大洪水(中略)昼九ツ時外堤六番カ子ノ午ヨリ切込下ノ方堤百間計流失新田多分亡所ト成」とあり, 外堤の六番が切れ, 東側の新田部分の多くが亡所になったことが記されている.

このように, 堤防の切れといった被害を含めると雁堤建造以後, 蒲原地域は複数回にわたり洪水被害を受けたことが記録されている. なお, 度重なる洪水のために天保十四年(1843)に東海道がより西側に付け替えられた[例えば, 渡邊(2014)].

§4. 富士川両岸の比高

国土地理院による基盤地図情報(数値標高モデル(5 m メッシュ))を利用し, 富士川の両岸部周辺の平野地帯における標高を比較した. 雁堤の建造後, 富士川は雁堤のすぐ西側を流れていたことは明らかであるから, そこを中心とする同心円上に測線を設定し, 複数の地形断面を得た.

この結果, 全体的な傾向として, 現在の流路を挟んで東岸部よりも西岸部の方が 1~1.5 m 程度高いことがわかった.

§5. おわりに

安政地震よりも前は富士川が西側を流れていたことと, 蒲原地域で洪水が頻発していたことと, および現在の地形に着目すると富士川を挟んで西側の方が東側より標高が高いこととを鑑みるに安政地震を契機に西岸部が広域的に隆起した可能性がうかがえる. 広域隆起を引き起こす断層としては, 本地域直下に分布すると推定されている入山瀬断層が考えられるが, 現状では安政地震との関係は不明である. 今後, 地質調査を通して入山瀬断層との関連を調査する必要がある.

謝辞: 歴史記録については, 木屋江戸資料館(静岡市清水区蒲原)の渡邊俊介氏および渡邊和子氏よりご教示頂きました. 地形データについては国土地理院の基盤地図情報(数値標高モデル)を利用致しました. 本研究の一部は「南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト」の予算で実施しました.